## 回帰後的政治発展与挑戦

講 師 : 印 紅標 氏(北京大学国際関係学院教授)

日 時:2010年11月5日(金) 17:00-19:00

場 所: 慶應義塾大学三田キャンパス大学院校舎8階 東アジア研究所共同研究室1

言語:中国語

概 要:

第5回研究会講師の印紅標氏は、香港の政治体制の発展過程とその特徴を踏まえて、 現在の香港での政党政治を分析した。印氏はまず、1843年から1984年までのイギリス統治 時代に香港の基本的な政治制度が構築されたことを指摘した。当時の中国にとって香港は 価値ある地域ではないと認識されていたが、実は香港をイギリスが統治したことによって イギリスが中華人民共和国をいち早く認める結果となったという歴史的背景を解説した。

印氏によれば、香港返還が決定した 1984 年から 1997 年の返還にいたるまでの香港政治は過渡期に位置づけられる。返還を前提にイギリスは香港内で民主主義の定着を図り、香港総督の制度は維持しながらも、1985 年には立法会での間接選挙を、1991 年には部分的直接選挙を実行した。1995 年からは全議員が直接選挙と選挙団や機能組織別の間接選挙により選出されている。

1997年から香港は中華人民共和国の特別行政区となり、選挙制度が維持されている。選挙が実行されるようになった影響として印氏は、政党(政団)による競争や「親英派」「民主派」「親中派」といった政策志向の差異に基づいた政治団体の争いが起こるようになったことを指摘した。また香港の主要な政党には民主党、民主建港協進連盟(民建連)自由党があるが、香港の政党はまだ政権を担うほどの能力を持たず、社会的影響も大きくない。印氏は、香港は民主化の過程にあるが、その実情は「愛国不愛党(国を愛するが党を愛さない)」の反映であると主張した。

質疑応答ではフロアから、香港の民主制度は大陸民主化のモデルになるか、温家宝の主張する政治改革の影響はあるか、北京政府は香港のケースを何の目的とするか、といった、大陸・中国の民主化と関連付ける質問が相次いだ。印氏は、香港の直接・間接選挙制度は民意を表す手法として成功しているが経済の影響を受けやすいという懸念がある、政治的に安定しているので中国の政治改革の影響は少ない、一国二制度で失敗することはできないという点で中長期的な戦略上の影響はまだあるが、香港の政治的影響力は次第に小さくなってきた、と丁寧に回答した。